Report on Eastern China : February and March 2010

メタデータ	言語: jpn
	出版者:
	公開日: 2017-10-03
	キーワード (Ja):
	キーワード (En):
	作成者: 弁納, 才一, 周, 如軍
	メールアドレス:
	所属:
URL	http://hdl.handle.net/2297/27747

中国華東地域訪問記録

── 2010年２月･３月 ──

弁　納　才　一
周　　如　軍

はじめに

筆者は，2010年の２月前半と３月中旬に研究経費と教育経費の２つの公費によって中国を訪問し，中国の大学との教育・研究交流と農村調査を行う機会を得た。

すなわち，2月４日～15日には弁納才一が金沢大学大学院人間社会環境研究科博士前期課程１年生の小早川裕悟君を連れて上海市と江蘇省南京市を訪問し，そして，そのほぼ１ヶ月後の３月７日～21日には弁納及び周如軍（金沢大学外国語教育研究センター非常勤講師中国語担当）と小早川君の３人が上海市と江蘇省南京市・無錫市を訪問した[1)]。

この２度にわたる訪問の主要な目的は，各自の研究にかかわる資料を上海図書館・南京大学図書館・南京図書館などにおいて閲覧・収集すること，小早川君が海外（金沢大学大学院人間社会環境研究科のリエゾン･オフィスが設置されている上海師範大学人文与伝播学院と南京大学中華民国史研究中心。なお，研究中心とは研究センターのことである。）で研究報告（周如軍が翻訳･通訳を担当）すること，中国の都市部と農村部における社会･経済の状況を視察することなどにあった。

以上のうち，中国農村における訪問聞き取り調査にかかわる具体的な内容の記載は別稿に譲ることにして[2)]，本稿ではそれを除いた内容を記載することにした。

なお，本稿では，煩雑さを避けるために，平易な表現になるように努め，原則として算用数字と常用漢字を用いた。

１．図書館における資料収集

⑴　上海図書館

上海図書館は，これまで何度も利用してきているが，中国の図書館の中では最も利用勝手が良い図書館であろうと思われる。短期間の利用者のために，１ヶ月間有効の図書閲覧カードが５元で発行される。今回，閲覧カードの申請は，受付の前に設置されているパソコンに各自が必要事項を入力して行うようになっていたが，入力方法がわからず，おろおろしていると，職員の方が親切に教えてくれた。

また，中国近代史に関する文献資料は，部分的に電子化されており，電子化された文献資料は近代史資料閲覧室内の閲覧席に設置された検索用のパソコン上で閲覧することができ，必要箇所は簡単に複写を依頼することができるようになっていた。

さらに，電子化されていない一般の図書・雑誌についても，検索用のパソコンで閲覧請求を行うことができるようになっており，電子化とペーパーレス化が進んでいると感じた。

⑵　南京大学図書館

南京大学図書館を利用するために，南京大学中華民国史研究中心主任（センター長）の張憲文氏に紹介状を書いていただいた。

ところが，南京大学図書館所蔵の期刊雑誌目録に載っている1949年以前に発行された雑誌の閲覧を請求すると，かなりの雑誌がなくなっていると言われた。筆者の弁納が南京大学に留学していた1989年９月～1990年７月にも閲覧したことがあるものだったので，1949年以前に発行された雑誌を所蔵していた旧図書館から現在の図書館に移管した際に紛失してしまった可能性が高いと考えられる。

一方，小早川裕悟君が特に利用を希望していた古籍部では，中華民国史研

究中心教授の馬俊亜氏の案内・紹介によって入室することができ，まず所蔵目録ファイルを見て必要なものの閲覧申請を行うようになっていた。

⑶　南京図書館

最近新築されたばかりの南京図書館は，2月に訪問した時には全館が利用可能となっていた。国内外の新聞を幅広く集めた1階の新聞室は図書館閲覧カードを提示することなく，完全に自由に閲覧することができたが，最上階にある古籍の所蔵室（古籍部）は閲覧に制限があり，南京大学の教員などからの紹介状がなければ，利用することができないようになっていた。

なお，図書の検索は全て利用カード（手数料10元）に与えられた暗証番号を検索用パソコンに入力して行うようになっていた。

２．学術交流

弁納は，金沢大学大学院人間社会環境研究科の海外リエゾン・オフィスを南京大学中華民国史研究中心と上海師範大学人文与伝播学院に設置する交渉･手続きを行ってきたが，このような関係もあって，2月と3月に両大学を訪問し，とりわけ3月には小早川裕悟君が両大学で研究報告を行うことになった。小早川君の研究テーマは「15･16世紀における通貨を通した福建と北陸地方との関連性」である[3)]。

⑴　上海師範大学

金沢大学大学院人間社会環境研究科のリエゾン・オフィスにかかわる連絡の窓口役を務めていただいた劉晴暄氏（上海師範大学社会学系講師）は，金沢大学大学院社会環境学研究科への留学経験があることから，小早川裕悟君の上海師範大学における研究報告に関しても全面的な御支援と御協力をいただいた。

小早川君の研究報告は，3月8日午後に上海師範大学の奉賢区校舎で社会学を専攻する学生40人ほどを前にして行われた。同校舎までは本部校舎からスクールバスで約1時間を要した。

今回の上海師範大学における報告は，社会学を専攻している学生であるこ

とを配慮して，パワーポイントを用いながら，研究内容の概要を手短に紹介した後，日本及び中国における図書館・資料館の利用状況と具体的な資料収集の仕方について説明するものだった。報告が終わった後，学生からは実に多くの様々な質問が出され，それに対して小早川君も適切に応答することができたと思われる。

⑵　南京大学

2010年２月に弁納が小早川裕悟君を連れて，南京大学中華民国史研究中心主任の張憲文氏を訪ねてあいさつを交わした際に，約１ヶ月後の３月に小早川君が研究報告をする場を設定していただくようにお願いしておいた。

３月11日午前に南京大学中華民国史研究中心主任の張憲文氏を訪ねて意見交換と打合せをし，午後に南京大学中華民国史研究中心教授の馬俊亜氏が司会を務め，同センターに所属する約10名の大学院生（小早川君と同じ修士課程１年生）が参加して，小早川君による研究報告とそれに対する質疑応答がなされた。

事前の翻訳と当日の通訳を務めた筆者の周如軍から見ると，報告と質問に対する応答は非常に要領を得て適切だったと感心するところが多かった。だが，日本語の文章の表現にはいくつか修正するべき箇所があったように感じられた。特に，主語と述語の関係や因果関係を説明する箇所の表現については，今後はより一層気を配る必要があると思われる。

３．参観・訪問

今回の参観先は，筆者がかつて訪問したことがある場所と今回初めて訪問した場所とに大きく分けることができる。

また，筆者の弁納は，金沢大学国際学類の学生が海外においてインターンシップ（就業体験）を行う場を確保するために，2009年９月に石川県に本社を置きながら上海市と江蘇省南京市に工場や事務所を置いている企業などを訪問しているが[4]，今回は新たに江蘇省無錫市に工場を置いている企業を訪問した。

⑴　上海市

２月６日午前，上海市嘉定区馬陸鎮石崗村へ行く途中で，南翔小籠包で有名な南翔の古猗園に立ち寄った（**写真１**及び**写真２**を参照）。上海の地下鉄11号線は2009年末から試運転が始まり，南翔や馬陸を通って嘉定まで行くことができるようになった。これまでも何度か訪問してきた嘉定区馬陸鎮石崗村へ行く途中に南翔があるので，何度も通過してきたが，今回初めて古猗園に立ち寄った。古猗園は地下鉄11号線の南翔駅からはやや離れているのに対して，上海から嘉定に行く「滬塘線」のバス停留所「古猗園」の目の前にあるので，今回はバスを利用した。

写真１．古猗園

写真２．南翔小籠包

また，２月12日午前，北国銀行上海事務所（上海市南京西路1376号上海商城350室）に筆安史氏を訪ねて行った。昨2009年９月に初めて訪問したが，３月に上海へ訪問する金沢大学国際学類の学生14人の送迎と企業・工場見学の案内などについて打合せを行った。今回訪問した当日は同事務所の年末仕事納めの日（2010年は２月14日が春節すなわち元旦）にあたっていたために，中国人スタッフへの対応などもあり，少しあわただしく，昼食をともにすることもできなかった。

さて，筆者の弁納にとって，上海歴史博物館の参観は今回が２回目となる。今回は，小早川君を案内することを目的としていたので，小早川君の研究に関わる中国歴代の貨幣を展示している階を集中的に参観した。同館１階の書

店では貨幣に関する専門書が多数販売されており，小早川君が購入を希望していた上海歴史博物館が発行した書籍もあった。

⑵　南京市

訪問日時：2010年２月・３月

訪問場所：夫子廟・中華門（２月），燕子磯・長江大橋（３月）

筆者の弁納才一（南京大学留学）と周如軍（南京大学卒業）にとっては，全てかつて何度か訪問したことのある場所である。

夫子廟は，もともと儒家の始祖の孔子（現在は学問の神様として崇拝されている）を祀った場所であるが，現在は南京の有名な観光地として整備されている。古くから廟会（縁日）で賑わっていたためであろうか，あたり一帯には多くの店舗が軒を連ねている。

中華門は，かつて南京市を取り囲んでいた城壁の南側の門であり，修築されて復元されている。その城壁の上に上って歩くことができる（有料）。ちなみに，城壁の北側の門は玄武門と呼ばれており，その門の内側に玄武湖が広がっており，現在は玄武公園となっている。

燕子磯は，長江を真下に眺めることができる景勝地で，有料の公園となっている。その入り口の側に燕子磯小学校があり，参観を願い出たが，拒絶された。同小学校には校庭もグランドもなく，小さく粗末な平屋建ての校舎が２棟ほどしかなかったためであろうか。そして，1980年代後半に初めて訪れた時には気付かなかったが，公園内には1980年代に作られた日本軍の燕子磯一帯への侵略に関する記念碑があった。

長江大橋は，南京と浦口に架かる橋で，上の自動車道と下の鉄道の二重構造になっている。南京側の川沿いの橋には有料のエレベーターがあり，下に降りることができ，河川敷の公園へつながっている。

⑶　揚州市

訪問日時：2010年３月13日

訪問場所：揚州駅（揚州市西部），揚州市街地，揚州バスターミナル（揚州市東部）

近年，南京から長江大橋を通って江蘇省北部（蘇北）の南通及び塩城まで鉄道が開通し，南京駅から蘇北の揚州駅（**写真３**を参照）までは最も速い電車で１時間余りで到着する。筆者の弁納は今回初めて揚州を訪問したが，もう一人の筆者の周如軍が南京大学の学生だった時にはバスで約３時間を要していたという。現在，バスで揚州まで行く場合は，鎮江から橋を渡って行くのが最短である。

写真３．鉄道の揚州駅

鉄道の揚州駅は揚州市の西部郊外にあり，駅周辺は駅舎以外に全く建物がなく，非常に閑散としていた。駅舎が農地を潰して建設されたことを窺い知ることができる。揚州駅から揚州市街地まではバスで移動することになるが，市街地まではかなりの距離があった。

鉄道の揚州駅から揚州市街地へ向かうバスは１路線だけである。そこで，とりあえず，このバスに乗車して，西から東に向かって市街地を通過して揚州市の東部郊外にあるバスターミナルまで行った（**写真４**を参照）。このバスターミナルは，真新しく，コンビニエンス・ストア，書店，レストランなど

を備えている。しかも，市販の地図には市街地により近いところに記されていることから，完成したばかりであろうと思われる。

写真４．「揚州汽車客運東站」(揚州東バスターミナル)

そのバスターミナルの正面向かい側に「広陵産業園」という看板があり，経済開発区が広がっている(写真５を参照)。

写真５．バスターミナルの前に広がる「広陵産業園」(経済開発区)

揚州の有名な景勝地である瘠西湖のほとりにある鑑真和尚と縁のある大明寺を見学に行ったが，入場料が非常に高額だったので，中には入らず，外から眺めることにした（**写真６**を参照）。この寺の近くの小径に線香や焼紙を売っている露天商がいた。足下の段ボール箱の中に銀両（銀塊，馬蹄銀）を真似て折った焼紙が見える（**写真７**を参照）。このような焼紙は，中国では古より死者を弔う時に焼くものである。かつては全て手工制の紙（土紙）だった。なお，筆者の周如軍は，中華民国期の中国における土紙業の展開について研究を行っている[5)]。

写真６．鑑真図書館から見た大明寺

写真７．線香と焼紙

大明寺の隣に鑑真図書館が建設中で，日本人観光客を呼び込むための観光地としての整備が進められていた（**写真８・写真９**を参照）。まだ工事中だったが，無料で参観することができた。

ただし，当地の地図に示されている繁華街・「美食街」にあるレストランで食した揚州炒飯はあまり美味とは言えず，また，研究書・専門書・地方誌などを揃えている書店を見付け出すことができなかったのは，非常に残念だった。

写真８．鑑真図書館

写真９．鑑真図書館入口

⑷　無錫市

ユニベールは，2009年９月に上海事務所を訪問したシンコールの子会社であり[6]，高級カーテンを専門に生産・販売している。ユニベールの本社は石川県金沢市の郊外にあり，事前に同社常務取締役の土合秀幸氏と連絡をとり，シンコール本社において面談し，無錫工場に関する簡単な説明を受けていた。ユニベール無錫工場（写真10を参照）を訪問した日は，総経理の遠藤孝氏が日本に一時帰国していたために，副総経理の高野哲男氏（写真11を参照）にお話を聞かせていただいた。

写真10．ユニベール無錫工場

写真11．（左から）小早川裕悟・周如軍・弁納才一・高野哲男

訪問日時：2010年３月16日
訪問場所：優昵蓓楽（無錫）装飾制品有限公司
（江蘇省無錫市錫山経済開発区東部工業園区安泰二路以北）
応 対 者：高野哲男（副総経理・工場長）

高野哲男氏の個人史

・1960年生まれで，2010年３月現在で49歳である。
・高校を卒業した後，両親の強い勧めもあり，２年間，簿記の学校で学んだ。勉強するように勧めてくれた両親には非常に感謝している。
・リストラの対象になりかけて苦況に立たされた時期もあったが，どうにか乗り越えてきた。
・ユニベールの新潟工場の立ち上げを主導した。
・2009年５月から無錫工場に赴任してきた。前任者は６月までとどまって引き継ぎを行っていった。

無錫工場の現状

・現在は品質の向上に最も力を入れている。そのために，日本から機械設備を導入し，また，欠品に関する情報のデータ化を進めながら欠品検査を強化している。
・従業員の教育はなかなか難しい。作業工程別にチーム（班）を編成して生

産目標を掲げ，基本給に能力給を上乗せしている。その結果，モチベーションの向上によって生産効率が向上している。

・2010年２月に従業員の最低賃金をそれまでの月給850元から960元に引き上げた。一般従業員の労働時間は8:00～18:30だが，いつも20:00まで残業している。

・この工場では日本への研究生制度を設けており，すでに２人を日本に派遣したが，現在，その２人が作業指導をしている。2010年は３人を日本へ派遣する予定であるという。

・安徽省や内陸部から家族連れでやって来た従業員には社員宿舎を提供している。

求める人材像

・会社で自分をどう生かせるか考えることができることが重要である。そのためには，世間を少しは見ている人間が望ましい。

・勉強ができるだけではだめで，学生時代に色々な経験をしておく方がよい。もちろん，中国で仕事をするのであれば，中国人社員と直接コミュニケーションをはかって信頼関係を築くためにも中国語が話せる方がよい。

・自分がやりたいこと（目的意識）をはっきりさせておくことが必要である。

・自身の経験から挫折を乗り越えていく力が必要である。

・高野氏が何度も強調されたことは，「失敗を恐れるな！失敗を取り繕うな！失敗をありのままに受け止めよ！」ということだった。

予定していた時間を超過して長時間にわたっていろいろとお話を聞かせていただいた後，工場内を案内していただき，設備や作業風景などを参観させていただいた。当該工場で製造されたカーテンは全て日本へ輸出されているが，参観した作業現場でカーテンがニトリのパッケージに袋詰めされているのを見た。

高野氏は自らも認めるように決して能弁ではないが，非常に実直な人柄に感銘を受けた。また，筆者の弁納とは年齢が近いこともあって意気投合した面もあった。

おわりに

今回の中国華東地域への訪問では，教育と研究にかかわる多くのことを同時並行的にこなすことになった。すなわち，大学院教育の一環として海外の研究機関で研究報告をさせること，学生の就職支援の一環として海外のインターンシップ先を開拓すること，研究機関・図書館などにおいて史料を収集すること，中国経済史研究を深化させるために現在の経済状況を都市と農村の両面から直接観察すること，農村において聞き取り調査を実施することなどである[7)]。

大学における業務は年々増え続けており，教員は多忙を極め，研究のための時間を十分に確保することが不可能となっている。また，実質的に教育に費やす時間を増やすことが求められており，海外での業務も増えていくことが予想される。

今後，このような状況に対応していくためには，教育と研究を一体化して進めていく工夫をする必要がある。この点から，今回の中国訪問は一つのヒントを与えてくれたように思う。

注

1）弁納の２月の出張が科学研究費補助金（基盤研究(B)）平成18年度～平成21年度「近代グローバル化のなかの瀬戸内海地域－東アジア社会における外来と在来視座から－」（研究代表者：勝部真人）の経費によるものだったのを除くと，他は全て大学院教育改革支援プログラム（平成19年度～平成21年度）「プロジェクト研究を通じた自立的研究者養成」（金沢大学大学院人間社会環境研究科，代表者：鏡味治也）の経費によって出張した。

2）弁納才一「華東農村訪問調査報告(4)－2010年２月・３月，江蘇省・上海市の農村」（『金沢大学経済論集』第31巻第１号，2010年12月）を参照されたい。

3）研究成果の一部は，小早川裕悟「15・16世紀日本と中国における通貨事情について」（金沢大学大学院人間社会環境研究所『人間社会環境研究』第19号，2010年３月）としてまとめられている。

4）詳細については，弁納才一「中国の華東地域における日系企業の現状について－2009年９月」（『金沢大学経済論集』第30巻第１号，2009年12月）を参照されたい。なお，これを参考にして，2010年３月５日～15日に金沢大学国際学類の学生16名が上海師範

大学において中国語研修と上海の日系企業の訪問を行った。

5）周如軍「近代中国における在来製紙業に関する研究と資料について」(東洋文庫近代中国研究班『近代中国研究彙報』第29号，2007年３月)・同「近代中国における手工製紙業の展開」(鹿児島国際大学附置地域総合研究所『地域総合研究』第35巻第１号，2007年９月)・同「近代浙江省における手工製紙業の展開」(金沢大学環日本海域環境研究センター『日本海域研究』第39号，2008年２月)・同「近代江西省における手工製紙業の展開」(『日本海域研究』第40号，2009年３月)・同「近代福建省における手工製紙業の展開」(『日本海域研究』第41号，2010年３月)などを参照されたい。

6）2009年９月にシンコール上海事務所を訪問した際に，ユニベール無錫工場のことを聞いていた。注４)を参照されたい。

7）農村における聞き取り調査については，弁納才一「華東農村訪問調査報告⑷－2010年２月・３月，江蘇省・上海市の農村」(『金沢大学経済論集』第31巻第１号，2010年12月)を参照されたい。